

池内紀 × 川本三郎

にっぽん そぞろ歩き

第5回 いい旅、いい町へは、列車に乗って



お二人は本当によく旅をしておられます。まさに年がら年中ニッポンをそぞろ歩いている。それは鉄道とセットです。ところが廃線が続出する昨今。日本の『豊かさ』の底の浅さを感じてしまいます。

大きな損失

川本 最近、体調はいかがですか？

池内 ガタガタです。なんとなく、体力に自信がなくなりしました。

川本 旅は、相変わらずされていますか？

池内 してはいるんですが、二泊三日がいいところで三泊になると、ちょっと辛くなってきました。

今度の大火で燃えてしまった糸魚川、あそこはいい町でした。もし、日本国内でもう一度行きたい町を五つ挙げよと言われたら、きつと入れるような町です。歩いていても、全然飽きない。

川本 そんなにいい町でしたか。だから逆に、古い家が多くて、火事に弱かったんでしょね。今回、大火

という言葉をも、久しぶりに聞きました。私などの世代では、記憶にあるのは、鳥取の大火（昭和二十七年）と酒田の大火（昭和五十一年）くらいでしょうか。

池内 酒田の大火は、今回の大火と条件がよく似ていましたね。

編集部 どちらも、折からの強風が火勢を強めてしまったようですね。

池内 かつての北国街道沿いにいい町並みがあって、まさに町の心臓部だったんですが、そこが全部焼けてしまっただけ。

川本 もったいないですね。あのへんは、漠然とコンビニナートのイメージがあったんですが。

池内 郊外はそうなんですが、糸魚川は、古くからのいいものをなんとかして残そうと、町の人たちがいろいろの知恵を出し合っている町でした。古くから商売をしている店が、飴屋だったら昔の駄菓子、文房具屋だったら贍写版といった具合に、蔵の中から出してきた得意ダネを、それぞれのショーウィンドーに飾っていました。

川本 贍写版とは懐かしい。ガリ版ですね。

池内 江戸時代には宿場町ですから、いろいろなこと

ろに文学的素材があって、昔の川柳や俳句が、電信柱なんかにもちよこんと貼ってあったりする。それが、なかなかいい。

川本 いい造り酒屋さんも、あったようですね。

池内 新潟でいちばん古い造り酒屋です。大通りには「滝の湯」という銭湯がありました。なにげなくノレンごしにのぞいたら、乱れ籠が積んであって、床もピカピカに磨いてあって、なんともいい感じなんです。風呂から出た後に「いまの時代に、銭湯に来る方はどれくらいいますか？」とご主人に聞いたら、「数は少ないんですが、郊外からも『温まりが違う』というので、お出でになる。その方がいらつしやる限りは、やります」と。それもすべて燃えたのかと思うと、本当にガツクリです。

川本 建物が密集していたんでしょね。向島に橋銀座という商店街がありますが、あのあたりは東京の下町には珍しく、空襲の被害にあわずに、木造の古い町並みがいまでも残っている。でも、こうした町並みは火事に弱いからというので、どんどん再開発されてしまっ。防災という観点から見ると、われわれが歩いていい町だなど思うのでは、全然違うんですね。